



奈良・白毫寺の木造閻魔王坐像(重文・鎌倉時代)の図 ©2016 金岡瑠璃子

慈悲は仏教のもっとも重要な徳目のひとつである。このことは誰もが認めることであるが、地獄が慈悲の場所といたら納得できるであろうか。地獄で亡者が舌を抜かれたり血の池に落とされたりする話は、慈悲とは正反対と感ぜざるを得ないだろう。

### 閻魔様の慈悲

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

## 地藏尊の宗教 ③

慈悲の思想は初期の仏教から説かれている。ブツダによれば、他者も自分と同じく自己愛があるのだから、自分がされて嫌なことは他人にしてはならない。殺生はその最たることである。そうした慈しみ、憐れみの気持ちを生きてし生けるものを持つべきであるというこ

とが『スッタニパータ』などの古い經典にブツダの言葉として伝えられている。のちに慈悲の思想はさらに整えられて、大乘仏教の『大智度論』には、「慈悲は一切衆生に『楽』を与えること、『悲』は一切衆生から『苦』を抜くこと、すなわち『与楽拔苦』と説明されている。言い換えれば、慈悲とは他者が嬉しむときに一緒に喜び、他者が悲しいときに一緒に悲しむ心である。そうすれば喜びは倍加し、悲しみは半減するであろう。

官としての閻魔様は、漢民族のあいだでつくられたイメージであって仏教本来のものではなく、その官服や髻も六朝から唐にかけての判官裁判官の姿である。本来の閻魔はインドのヤマという死者の国の王者で、それが仏教に取り入れられて地獄の王、閻魔王になった。『世記経』という原始經典を見ると、閻魔王は罰を与える判事ではなく、地獄に墮ちた亡者と共に苦しむ者として描かれている。それによれば閻魔王は、一日に三回、熱で溶けた銅を大きな鑊で飲み、悶絶して燃え尽きてしまう。しかし時が来ると元の姿に戻り、再び銅を飲む。閻魔王のこのように、君主の威厳はまったくない。閻魔王のこのように、行為は共にすることをいう。この場合の他者は地獄に墮ちた亡者たち、行為は地獄の苦しみであ

る。閻魔王が亡者と苦しみを共にすることこそ慈悲であり、それによって亡者の苦しみを軽減され、救われる。地獄に墮ちた亡者は、心の弱さや成育環境の劣悪さによって罪を犯した者たちである。業の思想によれば、他者に及ぼした行為は必ず自己に帰るとされる。これが仏教の因果応報の思想である。善も悪もその責任の第一は自己にある。刀の山を登ったり焦熱で焼かれたりする痛みも、自己が他者に与えた苦しみに他ならず、閻魔王から与えられる罰ではない。閻魔王はそれを共有することによって、亡者を救ってくださる。地獄が慈悲の場とされる所以である。大地の底で慈悲心を発揮する閻魔王は、漢民族の仏教を経て日本に至り、大地の恵みを持った地藏尊の別の姿と考えられるようになった。次回 は地蔵と閻魔の一体説を見てみたい。

### おはなし散歩道

## 羽根の音

柿市 木村 研

「昔のお正月の遊びといたら、羽根つきだろうなあ」

おばあちゃんが、押入れから、薄い板のような羽子板を出して言った。「羽根つきよ。」

「ああ。この黒い裏のついた羽根を、羽子板で突くんぞ」

おばあちゃんは、コン、コンと、羽根を突いた。「バトミントンみたいね？」

かおりは、メモを取りながら、学校の宿題で、「昔のお正月のあそび」を、聞いていたからだ。

「そうだね。一人で、空におかたって羽根をついて、落としたり、顔に黒い墨をぬられるんだよ」

おばあちゃんは、「この羽子板は、かおりにあげよう。墨も一緒に持つていくといい」といって、嬉しそうに笑った。

おばあちゃんの家から帰るときに、「かおり、何してんだ？」と、同じクラスの耕太が声をかけてきた。「今、おばあちゃんに、宿題を聞きに行ってきたんだ」

「宿題って？」

「昔の遊びのことよ」

「そうか」

耕太は、忘れてた、というように、丸い鼻の頭をピンと指ではじいた。「羽根つきよ。やってみる？」

かおりが、羽子板で、コン、コンと羽根を突いてみせると、「いいよ。羽子板を受け取って、耕太が、来いよ、というように、高尾山の麓の空き地に入っていた。やる気満々だ。「勝負よ。交代で羽根を



突いて、落としたりぼうが負けよ。負けたら罰として顔に墨をぬるのよ」かおりは、おばあちゃんから聞いたルールを説明した。耕太は、スポーツが得意だ。

勝負が始まった。コン、コン、コンと、いい音が響いていく。かおりは、おばあちゃんにこんな遊びをしていったんだ、と思ったとたん、目がそれて空振りをしてしまった。かおりは、負けた。

耕太は、「約束だぞ」と、筆に墨を含ませた。「だ、だめよ。冗談よ。冗談。かわいい女の子の顔に墨をぬる気？」かおりは、せまい空気を逃げ回る。その時、「私にも、その羽根つき、やらせてもらえませんか？」と、お坊さんが言った。

耕太は、びっくりした。「負けたら、顔に墨をぬるんだよ」

「よろこんで、ここに」お坊さんは、ここに笑って、つるつるの頭をだした。耕太とお坊さんの一騎打ちが始まった。

「さあ、どこからでもいらつしやい」お坊さんは、たすきをにかけて、着物のそでを縛ると、勝負が始まった。しかし、身体はついていかな。すぐに、空振りをして羽根を落としてしまった。

「いやあ。強いなあ。参った」そういうと、「さあ、どうぞ」と、頭を出した。「いいいの？」

耕太は、かおりをみた。「いんじやない」と、かおりが言うのと、耕太は、ふでにたつぷりスミを含ませ、大きな「X」を書いた。すると、お坊さんは、「やあ、ありがとう」と、二人に手を合合わせた。「どうして？」

「縁起物ですよ。縁起物。鬼は墨が嫌いといいますが、鬼は墨が嫌いといいますが、昔の人は、負けたら墨をぬるなんてルールを考ええんんですね」

「そういうと、お坊さんは、はい。お邪魔しましたね」と、お礼をいって、高尾山の参道を上っていかれました。

「ふーん。鬼って墨が嫌いなね」

「だから、墨をぬるのか」かおりと耕太は、顔を見合せて、どちらからともなく、また羽根つきを始めました。

コン、コン、コンと、羽根のいい音が、いつまでも響いていました。

(さし絵・小出 茂)